考古アラカルト28

昭和饗宴殿

http://www.kyoto-arc.or.jp
（財）京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館

饗宴殿とその東側の建物の復元図

1998年から2002年まで、京都御所の東側「饗宴場跡グランド」において京都和風迎賓施設の建設に先立つ発掘調査を実施しました。この場所は、昭和３年に実施された昭和天皇の即位大礼（「昭和御大典」といいます）の際に造営された饗宴殿があった所です。

実際の調査においても、饗宴殿の建物基礎とそれらをつなぐ梁（はり）の部材を検出しました。饗宴殿の南北方向は、身舎（もや）19間に南北１間づつ庇がつき、南北21間となります。基礎の間隔はすべて3.6mで、南北長は75.6mです。端から５間の位置には、それぞれ内側に向かう基礎列があります。こちらは建物の中央部を受ける基礎列で、５間を３間で割るため基礎の間隔は広くなっています。

コンクリート製の基礎は、それぞれが独立基礎となっています。方形の掘形底に栗石を敷き、一辺１m、高さは1.0～1.5mほどの台形の独立基礎が据えられています。本来はこの上に梁が架けられ、梁の上に建物の壁を受ける構造となっていました。基礎はすべて元位置に残されていましたが、梁は解体時に取り外され、基礎の周囲に横倒し状態で廃棄されていました。また、建物北縁の雨落溝や旧地表の状態も残されていました。

饗宴殿の基礎

饗宴殿の建物跡（北から）

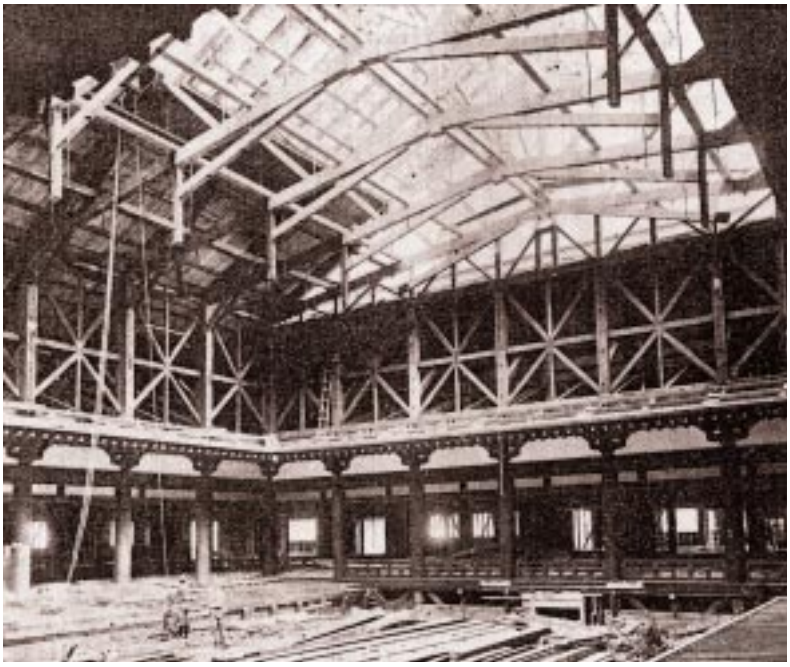
饗宴殿とともに、その東側に造営された一連の建物、廊の遺構も確認できました。建物はＡ～Ｆまで、廊はＧ～Ｌと仮称しますと、当時の資料から、建物Ａは椅子置場、Ｃは付立所、Ｆは調理場となっており、ここで調理や配膳が行なわれたことがわかります。

昭和御大典は昭和３年11月に実施されました。11月６日に京都行幸があり、11月７日より諸行事が続きます。10日が即位礼当日、14日には大嘗祭（だいじょうさい）があり、16日から大饗第１日の儀、翌17日に大饗第２日の儀と夜宴の儀がありました。大饗と夜宴の会場がこの饗宴殿で行なわれたわけです。

大饗の儀式では、天皇・皇后は北面中央の御座にあり、皇族・王公族以下、大使・使節・随員ならびに夫人らには飲食が振る舞われました。その際、中央の舞台では舞楽が演じられました。東側の建物・廊の状態から当時の様子を推測すると、建物Ｆ（調理所）で調理されたものは廊を通って建物Ｃに運ばれ、ここで最終調整された後、儀式場である饗宴殿に運ばれたと思われます。そのため、建物間には廊が通じる構造となっていたのでしょう。

昭和御大典では、この大饗の後、20日・21日に神宮親謁（しんえつ）の儀、23日から25日まで、神武天皇陵、仁孝天皇陵、孝明天皇陵、明治天皇陵などへの参拝があり、26日に東京還幸となります。式後、饗宴殿の建物はすみやかに解体され、各部材は下賜（かし）され、各地で再利用されました。

昭和３年の御大典は、日本が「昭和」という激動の時代に入る出発点となった儀式です。その遺構が京都御苑の地中に眠っていたことは、意外と知られていません。京都の昭和史を研究する上で重要な遺跡であるため、ここに紹介してみました。　　（丸川　義広）



大饗宴場の取解工事　『昭和大禮京都府記録』上巻　京都府1929年より転載

※ 昭和御大典については、以下の文献を参考にしました。

『昭和大禮京都府記録』上・下巻
（京都府　1929年）
『別冊歴史読本　図説天皇の即位礼と大嘗祭』1988年11月号
（新人物往来社　1988年）